

東北学院大学金子研究室川内村プロジェクト報告書

1. 活動の主旨

本報告書では、つぎの3点について整理してゆく。第1に本プロジェクトの主旨、第2に2023（令和5）年度の活動内容、そして第3に次年度に向けての展望である。以下、これらについて順を追って記述する。なおプロジェクトの主旨に関しては、昨年度と大きな変更がないため、共通の内容する部分が多い。

昨年に引き続き、本プロジェクトは、双葉郡川内村第7行政区での集落復興活動を行なった。私たちの活動は、「大学生の力を活用した集落復興支援事業」の枠組みでは、3年目に位置づけられ、伴走支援にあたっている。ただ、つぎの2つの理由から、実質的にほぼ2年目の活動であった。第1に、本プロジェクトの先行する活動（1年目の実態調査）は、他大学（跡見学園女子大学地域文化研究会）での取り組みであったこと。第2に、地域文化研究会の活動は2019（令和1）年度に実施され、その後コロナ禍となり、継続した実施が困難であったことである。

そのような事情があったものの、先行する活動で見出された課題を引き受けながら、参加メンバーは今年度初めて川内村で活動を行なった。ここでいう明らかになった課題とは、つぎのようなものである。川内村は原発事故により避難を余儀なくされた。その後いち早く帰村を選択したため、帰村率は高い水準にある。だが、震災後、過疎・高齢化が急激に進行している事実が明らかになった。とりわけ、これまで継承されてきた地域文化が衰退しつつあるという現状を把握することができた。寺社仏閣、堂宇・小祠といった、これまで集落単位で維持してきた地域文化が、維持し難くなっている現状を見聞きした。

私たちは、民俗学を専門としており、この領域では現地に出向き、緻密な聞き取り調査を行なう、フィールドワークを重要な研究手法としてきた。この方法を学んでいる私たちは、たんに地域の人びとと交流するだけでなく、民俗学の方法論にもとづいたフィールドワークを実施する計画である。すなわち、私たちの活動の目的は、民俗学の手法によるフィールドワークを通じて、集落の人びとが抱えている課題を把握し、また、その集落が持ち伝えてきた文化的資源を掘り起こすことで、少しでも地域の復興や集落維持のサポートを推進してゆくことにある。

地域課題と私たちの強みとを総合し、今年度の調査も、地域で大切に守られてきたが、担い手不足が深刻化しつつある地域寺社の調査に取り組みたいと考えている。とりわけ寺社の歴史的な分析を行なうことにより、この地域において当該寺社がいかなる由来・由緒や来歴をもつものであるのかを明確化していきたい。このような調査・研究を進展させることで、

地域内で寺社を維持するモチベーションを高めていただくことや、外部からの支援の可能性がひろがるものと期待している。

つまり、私どもの狙いは、地域の文化的資源を活かした復興である。このような取り組みは、インフラの復興とは異なり華々しさはないが、地域に住む人びとにとって重要なものであると確信している。これが私たちの活動理由であり、民俗学の視点を活かして、現状のままでは失われてしまう可能性のある地域資源を掘り起こしながら、地域の復興・持続へとつなげることを目指している。

2. 本年度の活動内容

ではつぎに、本年度の活動状況について説明する。本年度の活動内容は、下記の表1にまとめられる。以下、本年度の活動について説明してゆく。

表1：今年度の主な活動内容

年月日	場所	主な内容
2023年4月1日	第七区内	小祠の棟札調査
2023年5月10日	土樋キャンパス	横田家文書の読解・目録修正
2023年5月17日	土樋キャンパス	横田家文書の読解・目録修正
2023年6月7日	土樋キャンパス	横田家文書の実測・目録修正
2023年6月21日	土樋キャンパス	横田家文書の再撮影 以降、大学内で定期的に作業を実施した。 先行研究の輪読、報告書の作成、内容の確認など、のべ11回実施した。
2023年10月25日	第七区内	久保田区長に、これまでの調査状況を報告し、現地報告会の開催を依頼。また、聞き取り調査を実施。
2023年11月10日	第七区内	小祠の棟札調査
2023年11月29日	第七区集会所	横田家文書の成果報告会 区内のみなさまに加えて、教育委員会など役場関係のみなさまもご出席いただき、成果報告会を実施した。
2023年12月25日		報告書発行 『東北学院大学東北文化研究所紀要』(55)に収録

2024年1月10日	土樋キャンパス	展示パネル作成
2024年2月28日	第七区内	報告書配布と次年度の活動についての相談。あわせて聞き取り調査を実施。

私たちは、昨年の活動（史料調査・石塔調査・聞き取り調査）から課題を得ることができた。すなわち、地藏院旧蔵・横田家文書（切紙と符札からなる）の解読・分析を進めること、地域の歴史的文化と祀られた神仏を具体的に明らかにしてゆくこと、それらの成果を村民の皆様をはじめ、広く一般に紹介・普及すること、という課題である。本年度は、こうした課題の解決に向けた活動を行なった。



具体的には、まず切紙と符札の解読・分析を行なった。その結果、切紙は秘法の伝授に関わるものであり、その多くが庶民の悩みを解決するためのものであったことが、符札は切紙とほぼ同時期のものと推定され、高湯山や伊勢神宮に関連する珍しいものも含まれていることが明らかとなった。これらは、福島県内で見つかった修験史料と比較しても大変古い時期のもので、質量ともに充実した貴重な史料といえる。

つぎに、前年度の活動を継続するかたちで、石塔・小祠の調査を行った。とくに小祠の調査では棟札を扱い、小祠がいつから／誰によって祀られてきたかを調査した。



さらに、私たちの調査分析により明らかになったこと（地蔵院旧蔵・横田家文書の調査分析の成果）を、村民の皆様をはじめ、ひろく一般に知ってもらうことを目的とした活動を行なった。具体的には、①成果報告会の実施、②報告書の作成、③展示パネルの作成である。

①成果報告会は、2023年11月29日に、川内村第七行政区集会所にて実施した。ご参加いただいた村民の皆様には、地蔵院旧蔵・横田家文書の歴史的価値、およびそれを保存していくことの必要性について、あらためて理解していただけたのではないかと感じている。



②報告書の作成にあたっては、史料の目録作成・実測・撮影を行ない、2023年12月25日に発行の『東北学院大学東北文化研究所紀要』(55)に所収された。

③展示パネルの作成にあたっては、報告書の内容を一般の方々にも理解してもらえるように、分かりやすく、かつ見やすいレイアウトを心掛け、現在制作作業中である。



3. 次年度へ向けて

今後に向けては、大きく2つのことを行なっていくことを考えている。ひとつは、モノ資料を対象とした補充調査である。とくに石塔・棟札については、全体の半数ほどの調査が済んでいるものの、まだ全容の解明ができていないため、今後も調査を続けていきたい。

いまひとつは、これまで把握してきた歴史資料に基づく企画展示の実施である。上記のように、研究の成果を一般の人びとにも知ってもらうための活動も実施しているので、今後は川内村、そして東北学院大学博物館と連携し、これまでの活動で見出してきた貴重な史資料を紹介する展示を行なっていきたい。

また、今回の活動を担ったメンバーは卒業となるため、新たなメンバーを募り、活動を継続させていきたい。